18世紀初頭江戸城工事に見る工事手伝と幕府工事組織

TETSUDAI AND BAKUFU CREW ON THE RECONSTRUCTION OF THE EDO CASTLE
IN THE EARLY DAYS OF THE 18TH CENTURY

藤尾直史*

Tadashi FUJIO

This paper is on tetsudai and Bakufu crew on the reconstruction of the Edo castle in the early days of the 18th century. The sense of this paper is as follows:

1. This paper treats of the 18th century, which is rarely treated of in the former papers.
2. This paper treats of tetsudai, especially the relationship between tetsudai and Bakufu crew.
3. This paper treats of Bakufu crew, especially the relationship between Sakujikata, Kobushinkata and Fushinkata, which I myself have treated of several times in my former papers.

Keywords: Tetsudai, Bakufu, Bugyo, Toryo, Edo castle, 18th century

手伝、幕府、奉行、棟梁、江戸城、18世紀

0 序

本稿は18世紀初頭江戸城工事を素材に、工事手伝と幕府工事組織を論じようというものである。周知のとおり江戸城に関する論稿は決して少なくはない。だがここでの江戸城はあくまで素材であり、主眼は工事手伝と幕府工事組織を論ずることにある。したがって本稿と直接関わるものはおのずと限られてくる。

本稿の特徴の1点目は江戸中期への注目である。江戸城に関する従来の論稿はじつは扱っている時期に偏りが見られる²。この点はあまり認識されていないようだが、江戸城を論ずる上で無視できない点である。江戸中期を扱う本稿は一定の意義を有すると言える³。

本稿の特徴の2点目は手伝への注目である。この手伝への注目もじつは意外に限られている。本稿では特に江戸中期に注目した上で、手伝と幕府組織を関連づけて論じようとしている。この点でも本稿は一定の意義を有すると言える。

本稿の特徴の3点目は幕府組織への注目である。周知のとおり江戸幕府には作事方・小普請方・普請方という3つの役所があった。そして作事方は田辺・大河・西⁴、小普請方は鈴木・内藤・中村⁵の諸氏がそれぞれ詳しく論じてきた。普請方も拙稿⁷でその一端を論じた。ところが三者の相互関係はなお検討の余地を残している。この点は拙稿⁶でも繰返し強調してきた点であり、本稿はこのような既発

表の拙稿の成果を踏まえつつ、18世紀初頭江戸城工事の工事手伝と幕府工事組織を論じようというものである。

以下ここでは便宜上、①手伝、②奉行、③会所・棟梁の3つに分けて論ずるが、いずれも工事手伝と幕府工事組織を関連づけて論ずる点では変わりがない。

1 手伝

1.1 仕様

【史料1.1】⁹

一、御城内外御多門御櫓仕様帳、対馬守殿江致進達之、此通段々申付け候、思召も御座候ハ、追而被仰聞候様ニ申上候

【史料1.2】

一、御手伝方七手之家来、小屋江呼、面々丁場御普請之仕様帳、老冊宛相渡之

【史料1.1】は宝永元年(1704)正月22日のものである。城内・城外の多門・櫓の仕様帳を、若年寄へ作事・普請奉行らが進達し、仕様帳通り段々に申付け、思うことがあれば追って述べるよう申上げたとする。

【史料1.2】は正月24日のものである。手伝7手の家来を小屋へ呼び、面々の丁場の仕様帳を1冊ずつ渡したとする。これは手伝が奉行らから仕様帳を受取る立場にあったことを意味している。

* 東京大学総合研究博物館 助手・工修

Research Assoc., The University Museum, The University of Tokyo, M. Eng.

以上2点の【史料】では特に手伝が奉行らから仕様帳を受取る立場にあった点が注目される。

1.2 人足

【史料2.1】¹⁰

寛

一、古来より御手伝方本役老万石一日二百人宛出シ候積り、左候へ御扶持方公儀より一日百人扶持宛被下候、半役二候得ば老万石一日二五拾人ヅ、出候積り御座候、去ル天和三亥ノ年日光御宮・御堂御石垣築直シ御手伝、丹羽若狭守本高拾万石・役高七万石、内藤左京亮本高七万石・役高五万石、津輕越中守本高四万石・役高三万石、真田伊豆守本高拾万石・役高七万石、戸沢能登守本高六万八千貳百石・役高五万石之積りニ被仰出候、以上

二月 日

【史料2.2】

立花飛騨守役人

諸日用賃金定覧

一、川並 老 人 三匁五分
一、上蔭 老 人 三匁五分
一、中蔭 老 人 貳匁八分
一、幅太 老 人 三匁
一、平人 老 人 貳匁
一、千本突 老 人 老匁
一、枝突 老 人 老匁五分

右御石垣御手伝被仰付候七家雇人足、旧冬迄之分賃銀如此ニ相極申候、以上
正月十三日

【史料2.3】

一、八手之御手伝元々申合、当春より人足石方賃銀定之書付、対馬守殿工上申候事

【史料2.1】は手伝の役に関するものである。昔から手伝の本役は1万石あたり1日100人(半役は50人)、扶持は公儀から1日100人扶持だったとする。表1-aに宝永工事の数値をまとめた。一方天和3年(1683)の日光御宮・御堂の石垣工事の本高と役高は表1-bのようだったとする。ここでは具体的な数値とともに江戸城の工事の際に日光の工事の先例を引いている点を確認しておく。

【史料2.2】は手伝の諸日用の賃金に関するものである。ここでは日用を川並・上蔭・中蔭・幅太・平人・千本突・枝突の7種類に区分している。そして石垣の手伝を仰付けられた7家の雇人足の旧冬までの賃銀をこのように決めたと言っている。これは手伝相互の日用賃銀の統一が図られたことを意味している。

【史料2.3】は3月9日のものである。8手の手伝元々で当春からの人足石方賃銀を定めた書付を若年寄へ上げたとする。ここでもやはり賃銀の統一が図られている。

以上3点の【史料】では、①手伝の石高に応じて人足高が決められた、②手伝相互の日用賃銀の統一が図られた点が注目される。

1.3 建材

【史料3.1】¹¹

此御手伝人足入用 金貳万三千四百四拾兩程 松平大膳大夫
此御手伝人足入用 金老万三千貳百四拾三兩程 立花飛騨守
此御手伝人足入用 金五千四百四拾九兩貳分程 戸沢上総介
此御手伝人足入用 金五千五百老兩貳分余 稲葉能登守
此御手伝人足入用 金六千貳百八拾貳兩余 加藤遠江守
右御手伝人足入用金積り、建前・石垣坪詰老坪当り大積り、如此御座候、此外内証之用之義は員数難計奉存候、以上

六月六日

【史料3.2】

一、御用石払底、請負之石廻り合不申節は、御手伝方石請取候事滞候故、其内雇之人足手を明ケ申二付、御手伝方失道ニ罷成候、結局其内自分ニ而調築セ候方勝手能候由、依之御手伝方之内、左様ニも致度と申方も有之由ニ候間、左候へ御手伝方之手廻シにも罷成、第一御普請滞不申候ため、旁々以不苦思召候ハバ、内証ニて取はからい、右之通仕度と申方ハ、石滞候時分ハ御手伝方ニて調用させ、追而御勘定之節、右之わけ立、代金此方より御払ニ仕候

表1-b 天和3年(1683)日光手伝普請

手伝	本高(役高)
丹羽若狭守	100000石(70000石)
内藤左京亮	70000石(50000石)
津輕越中守	40000石(30000石)
真田伊豆守	100000石(70000石)
戸沢能登守	68200石(50000石)

表1-a 宝永元年(1704)江戸城手伝普請

手伝	石高	人足高1日本高(半役)-100日本高
松平大膳大夫	360000石	3600人(1800人)-360000人
松平右衛門督	320000石	3200人(1600人)-320000人
上杉民部大輔	150000石	1500人(750人)-150000人
立花飛騨守	109640石	1090人(545人)-109000人
丹羽左京大夫	100700石	1000人(500人)-100000人
戸沢上総介	68000余石	680人(340人)-68000人
加藤遠江守	60000石	600人(300人)-60000人
稲葉能登守	50000余石	500人(250人)-50000人

ハバ可然哉と存寄候段、対馬守殿江御内意申上候處、一段可然事二候、対馬守殿などハ御存不被成候分ニて、何れも心得を以、右之通致させ可然由被仰聞候、其段修理工申聞候事

【史料3.3】

一、石・材木渡シ方之義ニ付、御沙汰有之趣、御材木奉行手前承届候處、彼者共手前ニハ少も疑敷儀無御座候、常々げんミツニ仕候處、か様之紛敷沙汰御座候而は致迷惑候段申事候、しかれども肝煎之者又は請負之者など手前ニて紛敷義も有之候哉、此段無覚束と申候趣、彼是对馬守殿江委細申上候處、御聞届候由御挨拶二候、且又石・材木請取候節、三日程前、会所江御手伝方より申届候様ニ申渡置候、此以後は右之届ケ承候と可申上候間、其節御徒目付彼之場へ被遣候様ニ可被成哉之旨申上候へバ、尤思召候、先二三度も御徒目付被遣、様子御聞合可被成候間、右之通可相心得旨、被仰聞候事

【史料3.1】は6月6日のものである。手伝ごとの人足の入用積り、建前・石垣坪詰1坪あたりの大積りを書上げている。注目すべきは「内証之用」に言及する点である。

【史料3.2】は6月3日のものである。御用の石が底をつき、請負の石が出回らないと、手伝の石の受取りが滞り、人足の手があき、手伝の「失道」となる。それなら自分で調べて築く方が勝手もいいし、実際そうしたいとするものもいるとする。そうすれば手伝の手廻になり、工事も滞らないので、内証で取計らい、そうしたいものは、石が滞ったら手伝の方で調べさせ、追って勘定の際に代金を払うとしてはどうかと、若年寄へ奉行らが「内意」を申上げたところ、「心得」でそうせよとのことだった。あくまで心得とする点が興味深い。

【史料3.3】も同じく6月3日のものである。ここでは石・材木の渡し方に関する沙汰が問題となっている。材木奉行の手前では常々厳密にやっており、紛らわしい沙汰は迷惑とする。とはいえ肝煎・請負人の手前では紛らわしいこともあるかも知れず、この点は覚束ないとする。若年寄へ委細を申上げ聞届けられ、以後石・材木を受取る際は、3日ほど前に手伝から会所へ届けるよう申渡された。その際に徒目付を遣わしてはとの申上げももっともとされた。

以上3点の【史料】を見た。建材は官給が原則だったが、手伝の裁量を容認する意向もあった。その背景には建材供給の不安定さもあった。もっともこれはあくまで心得の範囲にとどまるものだった。

1.4 結

ここでは仕様・人足・建材の観点から、手伝の立場を論じてきた。18世紀初頭のこの工事では、手伝は①仕様帳を受取り、②人足を出し、③建材を受取る立場にあった。もっとも建材供給の不安定さもあつてか、手伝の裁量を認める意向もあったが、あくまで心得の範囲にとどまるものだった。

2 奉行

2.1 手伝・小普請

【史料4.1】¹²

覚

一、二之丸
一、三之丸
一、紅葉山下
一、半蔵御門より外桜田御門、馬場先御門際迄
一、山下御門より幸橋・虎之御門、溜池落口迄
此所御手伝割無之候、稲葉能登守丁場少候間、能登守江御加可被遊候哉と奉
存候
右之通御極可被遊哉、奉窺候
一、清水御門
右は申渡相済
一、半蔵御門際より田安御門、竹橋御門・清水御門際迄 御手伝無之場所
此所江御藏御加可被遊哉、奉伺候
十二月十七日

右之通窺書、今日四人申合、於御城但馬守殿江差出候処、大膳大夫丁場并勝
之助江大膳大夫丁場之内勝手次第被割渡候様ニ可申渡旨、且亦丹波五郎三郎
江紅葉山下御門御手伝被仰付旨可申渡段、但馬守殿被仰聞候二付、大膳大夫・
五郎三郎家来小屋江呼寄、四人立合申渡之候、以上

【史料4.2】

覚

一、蓮池御門
渡り櫓取壊、石垣取除、仮木戸門申付候
一、日比谷御門
渡り櫓取除、石垣繕、木戸門・仮番所申付候
一、田安御門
渡り櫓取除、下御門其尽差置、仮屋根仕、石垣崩候所、危ク無之様ニ取除
差置申候
一、大手・内桜田・外桜田・馬場先・和田倉・虎之御門・幸橋・山下御門・
数寄屋橋・鍛冶橋・呉服橋・常磐橋・神田橋・老ッ橋・竹橋・雉子橋・清水
御門・半蔵御門
右之所々往還ニ危ク目懸り候所、当分片付差置候様ニ申付候、御堀江崩候御
石垣等は、当年ハ片付難成候故、其通ニ差置申候
一、外郭ハ未御手伝不被仰付候故、少々危キ所も相見江候得共、片付不申候、
小普請方江成共片付候様ニ可被仰付候
十二月廿四日

【史料4.1】は元禄16年(1703)12月17日のものである。場所
ごとの手伝を伺っている。注目すべきは、三之丸は小普請方とある
点である。形式上手伝と小普請方の分担を伺っていることとなるか
らである。しかも老中に対して作事・普請奉行ら4人から伺ってい
る。つまり手伝と小普請の分担を作事・普請奉行らが伺っているこ
ととなるのである。

【史料4.2】は同年12月24日のものである。多くの門を当分片
付け差置くとしている。現在も残る田安門は渡櫓を取除き「下御門」
はそのまま差置くとするのは、清水門・外桜田門の扱いとも合わせ
て注目される¹³。なお外廓はこのときまだ手伝を仰付けていなかっ
たため、少々危なくとも片付けず、小普請方にでも片付けるよう仰
付けるべきとしている。ここでもやはり手伝と小普請の分担を問題
としているのである。

以上2点の【史料】はいずれも手伝・小普請の分業体制を示した
ものである。手伝・小普請の分業体制は、作事・小普請の分業体制
の反映ともいえるが、18世紀初頭のこの工事では実際上手伝・
小普請の分業体制が問題となっている点が注目される。

2.2 作事・普請奉行

【史料5.1】¹⁴

覚

一、竹橋より清水御門際迄御多門・渡り櫓・堀白土繕之儀、御手伝丁場割無
御座所二候間、小普請方より繕候様ニ奉存候、以上
十二月廿日

松平右衛門督
小普請方
丹羽五郎三郎
松平大膳大夫
加藤遠江守

【史料5.2】

覚

一、富士見御櫓より西拈橋迄之内、御櫓・御多門・堀白土、小普請方より申
付候様ニ被仰渡可然奉存候
一、先頃大和守殿被仰渡候紅葉山・西之丸境堀之儀見分仕候処、奥方御櫓之
内江右御手伝人足難入所二候間、小普請方より繕仕候様ニ被仰渡候ニと奉
存候
一、此間御渡シ被遊候杉原新右衛門・今福刑部左衛門差上候御繕之書付、吟味
仕候処、紅葉山御櫓之内、其上御宝蔵之内ニて手伝方人足難入奉存候間、是又
小普請方より申付候様ニ被仰渡、御尤奉存候、以上
十二月廿四日

水野権十郎
甲斐庄喜右衛門
大島肥前守
松平伝兵衛

【史料5.1】は元禄16年12月20日のものである。竹橋から清水
門までの多門・渡櫓・堀城土は、手伝の丁場の割当てがないところ
は、小普請方が繕うとする。作事奉行・普請奉行らから出ている。

【史料5.2】は同じく12月24日のものである。富士見櫓から西
拈橋の櫓・多門・堀白土は、小普請方から申付けるように仰渡すべ
きとする。また紅葉山と西丸との境の堀を見分したところ、奥方の
構えの中に手伝人足は入れにくいので、小普請方から繕うよう仰渡
すとする。さらに杉原・今福¹⁵から差上げた繕いの書付を吟味した
ところ、紅葉山の構え、宝蔵の中のため、やはり手伝人足を入れに
くいので、これも小普請方から申付けるよう仰渡すのがもっともと
する。このように手伝・小普請の場所分けに、作事・普請奉行らが
関わっているのである。この点は手伝と奉行の関係とともに、小普
請奉行と作事・普請奉行の関係を考える上でも重要な点と言える。

以上2点の【史料】も手伝・小普請の分業体制を示している。注
目すべきは両者が作事・普請奉行らから出されている点だろう。

2.3 作事・普請・小普請奉行

【史料6.1】¹⁶

此度御普請大工之儀、御作事方支配之大棟梁、小普請方支配之大棟梁打込相
勤、工割之義甲乙無之様ニ可被申付候、右之通、稲垣対馬守殿江相窺、如此
二候間、可被得其意候、以上
十二月五日

曲淵伊左衛門
布施長門守
水野権十郎
甲斐庄喜右衛門
大島伊勢守
松平伝兵衛

鈴木修理殿

【史料6.2】¹⁷

一、御玄關前溜り之内、大狐・小狐と銘御座候大石、拾間御多門入隅之方江、
三分・二分・三分一面ヲ出シ候へバ丈夫ニ御座候間、右入隅江二つ之石引込
申度奉存候二付、色々相談仕候処ニ、二重御櫓台石垣と拾間多門石垣之間、
八尺九寸御座候、此所掘候へバ二重御櫓台石垣危罷成候、御櫓江もさわり申
候二付、大石引込候儀難成奉存候

一、右式本之石、同所有来候石垣根石ヲ取、尺尺余も掘込、根石ニ御用イ可
被遊哉
一、右之通、大工棟梁・石屋棟梁久三郎書付出シ候二付、私共儀も見分仕候
所、棟梁共申候通ニ奉存候間、奉窺候、以上
申六月

松平伝兵衛
大島肥前守
甲斐庄喜右衛門
水野権十郎
布施長門守
曲淵伊左衛門
鈴木修理

【史料6.3】

覚

神田橋渡り御櫓下西南之方御門台・石垣見分仕候処ニ、丈夫ニハ相見江申候、
然共少々石口目違又は石痛候所ハ御座候間、能分ハ残シ置、悪敷所は弥築直
ニ仕可然奉存候、以上
七月十三日

松平伝兵衛
大島肥前守
甲斐庄喜右衛門
水野権十郎
布施長門守
曲淵伊左衛門

右は七月十三日ニ対馬守殿江御上ゲ候控

【史料6.1】は元禄16年(1703)12月のものである。若年寄の稲垣対馬守へ宛った後に、小普請奉行の曲淵・布施、普請奉行の水野・甲斐庄、作事奉行の大島・松平から鈴木へ出されている。今回の工事は作事方支配の「大棟梁」と小普請方支配の「大棟梁」が「打込」で勤める、工割に「甲乙」がないように申付けるとする。この点は既に論じた¹⁸⁾。

【史料6.2】は宝永元年(1704)6月のものである。玄関前の大狐・小狐の銘を有する大石の扱いが問題となっている。注目すべきは、①大工棟梁・石屋棟梁の書付に基づき見分を行っている点、②作事奉行・普請奉行・小普請奉行・鈴木らが連署している点である。

【史料6.3】は7月のものである。神田橋の渡櫓の下、西南の方の門台・石垣を見分したところ、丈夫には見えるが、目達や痛みもあるので、良い分は残し、悪い所は築直すべき、と説いている。

以上3点の【史料】では特に作事・普請・小普請奉行の三者が連署している点が注目される。

2.4 結

作事・小普請の分業体制は、幕府組織を論ずる基本論点とされてきた。ところが18世紀初頭のこの工事では実質的には手伝・小普請の分業体制が問題となっている。しかも両者の分業体制に関わる文書を、作事・普請奉行らが連署・上奏していることもわかる。なお作事・普請・小普請奉行の三者が連署するものもあった。

3 会所・棟梁

3.1 会所

【史料7.1】¹⁹⁾
所々ニ而おろし候瓦、丸・平其外品々之瓦、積分ケ被差置、おろし仕廻候場所より品々此方へ御達可有之候、瓦見分之者被差置候間、左様ニ御心得可有之候、以上

正月廿日 会所
七手御手伝方元々衆中
追而順々御廻し、会所へ品々御返し可有之候、以上

【史料7.2】
覚
一、冠木御門筋金物放シ候義ハ、見分ヲ遣シ、遂吟味可申付候間、御届ケ可有之事
一、渡り御櫓破風包板并鯨・軒樋取おろし候義、飾方立合セ、遂吟味可申付候間、御届ケ可有之事
一、樋釣り金物并瓦留メ金物、其外有来候古金物之義ハ、鍛冶方立合セ数改、遂吟味可申付候間、御届ケ可有之事

正月十六日 老ツ橋会所
香川太郎兵衛殿 南部与一兵衛殿 上田伊織殿
鮎川作右衛門殿 小泉七左衛門殿 黒田伝太夫殿
安東弥三右衛門殿 河田助右衛門殿 中西権兵衛殿
岡金左衛門殿 長尾半蔵殿 井上左七郎殿
舟生源右衛門殿
瀬川小兵衛殿

【史料7.1】は宝永元年(1704)正月20日のものである。7手の手伝らの元々衆中へ、会所から出されている。所々で下ろした瓦は、丸瓦・平瓦。その他の瓦に分け、場所から会所へ達するよう求めている。そうすれば見分のものを遣わすからそのように心得よとしている。手伝と幕府組織の関係を示すものと言える。

【史料7.2】は正月16日のものである。やはり7手の手伝の元々らへ会所から出されている。冠木門の筋金物を放したら、見分を遣わし吟味を行うよう申付けから届けること、渡櫓の破風包板・鯨・軒樋を下ろしたら飾方のものを立合わせ吟味するよう申付けから届けること、樋釣金物・瓦留金物などの古金物は鍛冶方を立合わせ

表2 宝永元年(1704)江戸城手伝・棟梁

手伝	棟梁
松平大膳太夫	甲良基兵衛・佐藤与惣兵衛・木島孫七郎・高橋治右衛門
松平右衛門督	原玉頼助・長谷川平兵衛・橋本伊右衛門・堀三左衛門
丹波左京大夫	甲良作左衛門・今西清左衛門
立花飛騨守	中原仁右衛門・沢村与八郎
加藤遠江守	橋本五左衛門・松沢惣八
戸沢上総介	伊丹喜兵衛・小島清五郎
細葉能登守	松井基右衛門・宮川庄太夫
吉川勝之助	※「大膳太夫ト同断」
上杉兵部大輔	松本平蔵・安川善太夫
松平兵部大輔	木島孫七郎・橋本伊右衛門・堀三左衛門
鶴島橋津守	伊丹喜兵衛・小島清五郎・宮川庄太夫
伊東大和守	甲良作左衛門・今西清左衛門・沢村助右衛門
黒田伊勢守	中原仁右衛門・沢村与八郎・高橋次右衛門・松井基右衛門
秋月長門守	橋本五左衛門・松沢惣八
六郷伊賀守	加藤庄左右衛門
毛利周防守	加藤庄左衛門
酒井親貞佐	杉浦六兵衛・岩佐市左衛門
内藤能登守	中原平左右衛門・田中三郎兵衛
松平周防守	木戸五太夫・山田清兵衛・桑原伝八郎・前島幸兵衛・上原七兵衛
有馬大吉	下野八郎兵衛・小野新助
永井日向守	井口勘右衛門・上野弥十郎
松平采女正	福田清太夫・都築五郎太郎
小出伊勢守	※「筋違ト同断」
惣世話やき	平内長右衛門・久村基左衛門・河合理兵衛
外世話やき	西井健兵衛・計内又左衛門・松井茂左衛門
木遣し	原五郎左衛門
木取棟梁	中野太郎右衛門・久村基三郎・松井八郎左衛門

数量を改め吟味するよう申付けから届けることとしている。

以上2点の【史料】は瓦・金物など旧来の建材の扱いに関するものだが、いずれも手伝らの元々に対して会所から出されており、この点は建材が原則官給だったこととも合わせて注目される。

3.2 棟梁

【史料8.1】²⁰⁾

前書

一、此度御手伝方より音物等受納仕候品々、不隠置可申上旨奉畏候、先頃被仰付候通、軽キ物等ニ而も一切受納不仕候、併御録初・御普請初之節は、前々より祝儀は受納仕来候ニ付、其節其わけ申上、受納仕候事

一、向後若御手伝方より音物等も御座候ハ、受納不仕、早速可申上候、尤仲間ニ而も受納仕候者御座候ハ、承出シ次第、早速可申上候事

一、先条被仰付候通、弥以堅相守可申事

罰文

宝永元年申年五月

杉本源兵衛
鈴木貞右衛門
坂本七左衛門
松坂源太郎
依田藤右衛門
清水弥左衛門
増田清右衛門

【史料8.2】

口上之覚

拙者共仲間何も御手伝方より御音信無御座候、御自分之御頼御用被仰付候御方よりハ、御頼被成候御礼金銀被下候以上

五月晦日

松井弥七郎
鉢阿弥喜七郎
同 才兵衛
高井弥惣右衛門
同 五郎兵衛
鈴木又三郎
安間源太夫

【史料8.3】

覚

一、町棟梁之義は、従公儀御扶持方被下候者ニ而も無御座候、御雇之者ニ付従公儀一切被下物も無御座候、惣而御手伝方場所御普請之様子ニより、武人・三人もわかれ付申候、就夫御用之外御手伝方御自分之場所ニ而、絵図・差図・積り物・釘払等、御手伝役人白人之不罷成義ハ、前々より内証ニ而御頼、用事相并申候ニ付、入用等も懸り候ニ付、相対ニ而私金等被給候由承申候、此義は拙者共も差図不仕義ニ御座候、兼而申上置候、尤此外、鍛冶・鋳等品、御手伝方ニ而紛失、自分より内証ニ而仕足被申付候分ハ、代金被差出候様ニ及承申候、ケ様之義御聞まがいも可有御座義と申上置候、以上

五月廿九日

鈴木修理

【史料8.4】

一、御手伝方より音物等受用不仕候趣之義、且又前以申付候通、弥可相守段、御被官不殘小屋ニ而神文申付候、棟梁は修理宅ニ而誓旨申候事

【史料8.5】

一、惣御手伝方より末々之者迄、音物何二而も不被相送候様ニ、家来共へ申渡置度由、但馬守殿・対馬守殿江御内意承候処、不苦候間、何も以意得申候様ニと被仰候故、則小屋にて面々家来へ申渡之候事
 一、此間被仰候義ニ付、末々之者迄急度申付、神文致させ、御殿初・御普請初前々より受納仕来候音物之外、受不申候段、且又向後輕キ物ニても受納仕間舖旨、堅ク申渡候由、其外何れも存寄之義、但馬守殿・対馬守殿江委細申上候事

一、町棟梁之儀ニ付、鈴木修理差出シ候書付、対馬守殿江致進達候事

【史料8.6】

一、御手伝方御算用仕上ゲ候節ハ、町棟梁頼申事ニ候、是又自分雇候間、外ニ賃銀もらい申二而可有御座候、此旨前々申上置候得共、まぎらわ敷御座江も候ニ付、弥為御心得、重而御物語仕候由、対馬守殿へ申上候得ば、御座候御尤之由被仰候事

【史料8.1】は宝永元年（1704）5月のものである。手伝から音物など受取った品々は隠さず申上げる、軽いものでも一切受取らない、鍛初・普請初など以前から受取ってきた祝儀はわけを述べて受取る、今後手伝から音物等があったら受取らず早速申上げる、仲間で受取ったものがいたら早速申上げるなどとする。

【史料8.2】は5月晦日のものである。壁方・鍛冶方・鋳方など諸方の棟梁らが連署している。手伝から音信はない、御用を頼まれたら御礼金銀を下されるなどとする。

【史料8.3】は5月29日のものである。作事方町棟梁は、公儀から扶持を下されるものではなかった、雇いもので公儀からの下されものは一切なかったとする。まずはこの点が重要である。今回の工事では手伝の場所の様子により、町棟梁が2-3人ずつ分かれてついていた。【表2】に具体像をまとめた。注目すべきは御用のほか手伝の場所で絵図・差図・積物・釘払など手伝役人、素人が出来ないことは、以前から内証で頼んだとする点、用事をわきまえ入用もかかるため、相対で私金を給するとの話もあるとする点である。もっともこれは鈴木の手伝ではないとあらかじめ奉行らに申上げている。また鍛冶・鋳などの品を手伝が紛失し、そのため内証で足すよう申付けた分は、代金を出しているとの話もあったようで、誤りもあろうとはしつつも奉行らへ申上げている。

【史料8.4】は5月晦日のものである。手伝から音物等を受取らない、以前申付けた通りを守る、被官は残らず小屋で神文、棟梁は修理宅で誓詞とする。

【史料8.5】は6月朔日のものである。手伝から末々のものまで、音物を贈らぬよう家来へ申渡したいと老中・若年寄へ奉行らから内意を承って小屋で面々の家来へ申渡した。また末々のものまで急度申付け神文をさせ鍛初・普請初など以前からの音物以外は軽いものでも受取らぬよう堅く申渡したと申上げている。

【史料8.6】は10月10日のものである。手伝が算用を仕上げる際に町棟梁へ頼む。これは自分が雇っているが、ほかにも賃銀を貰っているようである。この点は以前も申上げたが紛らわしい話もあったため心得のためとして若年寄へ再度申上げもともととされた。

以上6点の【史料】を見た。それぞれ手伝と被官・諸方棟梁・大工棟梁（町棟梁）との関係を示すものだが、最も注目されるのはやはり手伝の場所に数人ずつ棟梁（町棟梁）らが関わり、業務の一端を担ったとする点である。

3.3 結

ここでは手伝に対する会所・棟梁の立場の一端を論じた。手伝の場所を出る使用済みの建材については、会所から見分を遣わすこととなっていた。この点は建材が原則官給だったことと合わせて注目される。また手伝の場所に数人ずつの棟梁（町棟梁）が付いていた。この点は特に手伝と幕府組織の分業の実態を示すものとして注目される。

4 結

本稿は18世紀初頭江戸城工事を素材に手伝と幕府組織を論じたものである。まず手伝の立場を論じた。手伝は仕様を受取り、人足を出す立場にあった。建材は原則官給だったが、供給の不安定さから手伝の裁量を容認する意向もあった。次に手伝と奉行の関係論じた。手伝・小普請の分業体制を作事・普請奉行が同立場にあった。この点は作事・普請・小普請の三者の関係を論ずる上で重要である。最後に手伝と会所・棟梁の関係を論じた。手伝の場所を出る使用済みの建材については会所から見分を遣わすこととなっていた。この点は建材が原則官給だったことと合わせて注目される。また手伝の場所に数人ずつの棟梁（町棟梁）が付いていた。この点は特に手伝と幕府組織の分業の実態を示すものとして注目される。

注

¹ 『東京市史稿』皇城篇（1911-）、村井益夫『江戸城』（中公新書、1964）、文化財保護委員会編集発行『重要文化財江戸城田安門、同清水門修理工事報告書』（1967）

² 内藤昌『江戸と江戸城』（鹿島出版会、1966）は江戸初期、西和夫『江戸建築と本途帳』（鹿島出版会、1974）は江戸末期に力点を置いている。『日本名城集成江戸城』（小学館、1986）は万治度本丸造営と天保度西丸・弘化度本丸・万延度本丸造営等を論じている。『城郭・侍屋敷古図集成江戸城Ⅰ（城郭）』（至文堂、1992）も大勢は変わらない。

³ もちろん最終的には通史的な見解が問われることは十分承知しているが、現段階では史料的に困難と言わざるを得ないし、逆に安直に通史を要求する論者の立場には一定の疑義を示していく必要もあると考えている。

⁴ 最近では北原米子『江戸城外堀物語』（筑摩書房、1999）が詳しいが専ら江戸初期を論じている。

⁵ 作事方は、田辺泰「江戸幕府作事方職制に就て」（『建築雑誌臨時増刊大会論文集』、1935）、大河直躬「幕府の建築と作事方」（『世界建築全集』3、平凡社、1959）、西和夫『江戸建築と本途帳』（鹿島出版会、1974）が詳しい。

⁶ 小普請方は、鈴木解雄「江戸幕府小普請方について」（『日本建築学会論文報告集』60、1958）、内藤昌・中村利則「江戸幕府小普請方の成立過程について」（『日本建築学会学術講演梗概集（北海道）』、1969）が詳しい。

⁷ 拙稿「江戸幕府普請方の雇棟梁の雇入とその意義に関する一考察」（『日本建築学会計画系論文集』543、2001.5）

⁸ 拙稿「江戸幕府小普請方・普請方への棟梁の異動に関する一考察」（『日本建築学会計画系論文集』546、2001.8）

⁹ 1-2 鈴木業三・保田晴男編『近世庶民生活史料未刊日記集成・第五巻鈴木修理日記三』（三一書房、1998）作事方大工頭鈴木長常長頼父子らの日記。作事・普請奉行らと思われるものを含む。文中で適宜述べる。

¹⁰ 1-3『日記四』

¹¹ 1-3『日記四』

¹² 1-3『日記四』

¹³ 清水門・外桜田門も「清水御門建直シ之義、対馬守殿江相伺候処ニ、弥建直シニ可申付旨被仰候間、其段修理江申渡候事」「外桜田御門建修復ニ仕答ニ候へども、殊外損シ候ニ付、建直シニ罷成候書付、対馬守殿江差出候処ニ、建直シニ可仕由被仰候」（『日記四』）などであることから、いずれも宝永工事で解体・再建された可能性があるし、宝永工事に限った問題でない点も注意を要する。

¹⁴ 1-3『日記四』

¹⁵ いずれも富士見御宝蔵番之頭である。（『大日本近世史料・柳宮補任』）

¹⁶ 1『日記三』2-3『日記四』

¹⁷ 6月8日条に記している。

¹⁸ 拙稿「江戸の棟梁・職人に関する一考察―巨大都市江戸の建設業者に関する基礎研究1」（『日本建築学会関東支部研究報告集（2000年度）』、2001.3）

¹⁹ 1-3『日記四』

²⁰ 1-3『日記四』

後注

本稿は科学研究費補助金の成果の一部である。記して感謝申上げる。